The Creation of the Gibson World.

新たなる ギブソン・ドリームの幕開きに

ギブソン、その一世紀に[illegible]とする輝ける歴史の中に、
作業的道具にすぎない楽器が名画、彫刻のごとく
収集価値ある羨望の芸術品として昇華し得たプロセスがある。
一朝一夕にして成ったものでないからこそ、
幾多の伝説が語り継がれ、他を圧倒する存在感でシーンに君臨し得た。
偉大なるギブソン、そのプレリュードの第一章を知るだけで、
新たなるギブソンの
驚くべき底力と果てしない可能性を想像できるに違いない。

オービル・H・ギブソンの 偉大なる第一歩

1856年、ニューヨーク州[illegible]で偉大なるギブソンの創始者[illegible]、音楽と楽器をこよなく愛し続けた男、オービル・H・ギブソンは生まれた。成人してミシガン州カラマズーに移り住んだオービルは、[illegible]の仕事を経験する他、[illegible]者として働いてもいたが、少年時代から木で様々のものを[illegible]るといった趣味が昂じて、バイオリンやマンドリンを作りはじめ、1894年オービルが38歳になった年に、[illegible]本業へと切り替えてしまった。

カラマズー・サウス・[illegible]・ストリートの10平方メートル足らずの小さな工房ではあったが、この工房でオービルはオリジナルな楽器の開発をはじめたのである。これが長い伝統に培われたギブソンの事実上の輝やかしい第一歩であった。

ここでの最初の仕事はバイオリンの製作であったが、何故そうなったのかは明らかではない。しかし、その時に会得したバイオリン作りのテクニックが後のカーブドトップ・バックを持つ独特のスタイルのマンドリン、ギター、[illegible]ーあるいはそのバリエーション製作に大いに役立ったことは紛れもない。実際にその優れたデザインとトーンクオリティーによって極めて高い評価を得ていった。

8年後の1902年ギブソン・マンドリン・ギター・マニュファクチャリング・カンパニー・リミテッドが設立された。オービルはここで一切の出資をすることなく、ギブソンの名称使用権とパテント類を会社に売却、自身はコンサルタントとしてだけ関わり、全く楽器の製作は行わなかった。オービルの楽器職人気質が会社という組織を嫌ったからかもしれない。

1903年ギブソン・ブランド初の製品カタログが発行され、また1906年には拡大した会社名をギブソン・マンドリン・ギター・カンパニーに変更する等、次第に発展し、その間エレベーテッド・ピックガードのパテント申請、スタイル"J"バスマンドリンを発表し、全マンドリン・シリーズを完成させた。当時、一世を風靡したマンドリン・ミュージック・シーンの中でますますギブソンの名は高められて行った。

ロイド・ロアーの参加

その時、ギターは新たな
鼓動を始めた。

第一次世界大戦が終了した頃、アメリカ音楽の流行はマーチであり、やがてダンスミュージック、デキシーランドジャズへと変わって行く中、演奏のメイン楽器としてバンジョーが脚光を浴びはじめた。このムーブメントをギブソンが見逃すはずもなく、いち早くバンジョー・ラインを導入したが、惜しくもこの年、オービル・H・ギブソンは62歳でこの世を去ってしまった。

オービルが楽器製作に携わったのはわずかに24年間という短い期間ではあったが、オービルが残した楽器に対するクラフトマンとしての情熱は消えることなく、ギブソンの名とともに受け継がれて行くことになる。偉大なる創始者であり、最も信頼できるコンサルタントであったオービルを失ったギブソンは1920年、当時著名な演奏家であり、作曲家であり、後にノースウェスタン大学の音響物理学の講師を務めたロイド・A・ロアーを経営陣に迎え入れた。

ロアーの革新的能力を得て、ギブソンのクォリティーは全ての製品に渡って飛躍的に向上した。その典型ともいえる例がF-5マンドリンであり、L-5ギターである。このL-5こそがギブソン・ギターの原点ともいえるものであり、その類いまれなるトーン・キャラクターはアーチドトップギターのリファレンスとして広く認められている。

ロアーがギブソン社に籍を置いた6年間に、このL-5の他にバンジョーのトップモデルと言えるマスター・トーン・バンジョーを完成させている。フローティング・ヘッド、ボール・ベアリング・リムなどのアイデアは全てロアーが生み出したものである。現在、ギターの基本スペックになってしまっているトラス・ロッドやアジャスタブル・ブリッジ、さらにはフローティング・ピックガード、"f"サウンドホール等ロアーが開発したメカニズムは後のギターに計り知れない影響を与えた。

1924年ロアーはエレクトリック・ピック・ギターの開発を最後にギブソンを去り独自にエレクトリック・ギターの開発に取り組むが、時期が早すぎたため市場には受け入れられなかった。この間、音楽のスタイルはバンジョーからギターへの指向は[illegible]、そうした状況の中でギブソンはL-0、L-1を、またL-5の流れを引く"f"ホール・ギターL-10、L-12等を続々と発表。そして1934年その決定版と評されるスーパー400を世に送り出した。

1936年になってギブソンはES-150で初めて本格的なエレクトリック・ギターを発表することになる。それは、レコーディングプレイヤーに愛用された。ピックアップをボディーのえぐれたベルト状のもので固定した「非常式」なスタイルはあったものの、ギターに標準装備されたのはギブソンとしてはこれが初めてであった。

しかし、その後10年の時を待たなければ、エレクトリック・ギターに対してプレイヤーも聴衆も興味を示すことはなかった。しかし、ES-150と同時期に発表されたエレクトリック・ハワイアンギター、いわゆるラップ・スチールの原形であるEH-150は「革命的な楽器」として多くのプレイヤーに好評を博し、これに気を良くしたギブソンは相ついでエレクトリックな弦楽器を発表し続けた。

1941年太平洋戦争ぼっ発後、事実上ギブソン社の生産ラインは中断したものの1945年新たな飛躍の年を迎えた。戦後の動きの中で音楽もかわり、ジャズのビバップ・スタイルでチャーリー・クリスチャンがES-150を使ったことなどが影響し、その後に発表されたエレクトリック・スパニッシュギター・ES-100、ES-125、ES-250等が市民権を持つようになり、ES-300はブルース・ギタリストのT・ボーン・ウォーカーに使用され、1947年にはES-350が登場した。

こうして、トップメーカーとしての地位を揺るぎないものにしていったギブソンは1950年、テッド・マッカーティの社長就任とともに大きくその流れを変え、この時からギブソンのゴールデン・フィフティーズが始まるのである。

レス・ポールと ギブソンの出会い

デラウェア・ウォーターギャップの
歴史的会見は
ギブソン・ゴールデン・フィフティーズ
の幕開け

ギターは箱で鳴らすものと考えていたギブソンは、昔ながらのやり方でホローボディ、セミホローボディのギターを作り続けていたがプレイヤーの間ではソリッドボディ・ギターに対する反響が高まりつつあった。

1946年ギタリストのレス・ポールが手作りのソリッドボディ・エレクトリックギターとそれに関する全てのアイデアを手にギブソンのドアを叩いた時、当時まだビッグネームにはほど遠いレスのおよそギターとは称しがたい珍品が次代の担い手になるとは思われず、一度は断った。しかし、しだいにその可能性の中に無視できないものを感じとったギブソンはようやくソリッドボディ市場への参入を決意し、再びレスとコンタクトをとり、やがてプロトタイプが完成し、デラウェア・ウォーターギャップでの歴史的な会見につながって行くのである。

レス・ポール・ ミニ・バイオグラフィー

1916年6月9日、ウィスコンシン州ワークシャに生まれたレス・ポールは子供の頃から楽器に親しみ、ハーモニカ、バンジョー、ピアノなどを得意としていた。中でもハーモニカは10代前半ですでにプロとして通用する腕前であったという。

また、当時流行った鉱石ラジオにも凝っていたというが、楽器もラジオも正式に学んだわけではない。全て独学で、後にマルチレコーディングやソリッドボディギターの先駆者たる土壌が培かわれるという、音楽とエレクトロニクスが同時に育っていった少年時代であった。

12歳の時はじめたギターも14歳にしてプロの域に達し、やがて中西部最大の都市シカゴでミュージシャンとしての活動を開始。カントリー＆ウエスタンもジャズもこなす、器用なギタリストとして才能を発揮しながらもエレクトロニクスの研究に熱を入れ、31年にはブリッジにピックアップを取り付けたギターを、33年には遂にコイルを巻いたピックアップを作ったという。

何と50年以上も前に若干14.5歳の少年が、手作りのギターを弾いていたのである。自らの音楽のためにギターを作り、より良い物へと改良を重ねるといった日々を続けながら「サスティーンの増加」と「ハウリングの解消」について、彼なりの解答が見えはじめたのはこの頃だった。

1934年ボディの振動が弦の振動を止めてしまうことに気がついたレスはシカゴのラーソン・ブラザースという楽器メーカーにfホールのないメイプルトップのギターをオーダーする。この世界で初めての2つのピックアップをマウントした½"ソリッドメイプル材ギターは期待通りの音を出した。

レスはソリッドボディが弦振動を止めることはない事と同じ理論から手持ちのエピフォンのボディトップの内側に取り付けたスティール棒がボディの振動の吸振効果をすることを実証したのである。1936年ジャズギタリストとしてレス・ポールトリオを組みニューヨークへ渡ったレスを待っていたのは何とエピフォンの工場であった。1941年レスのあの有名な「Log」はここで誕生したのである。

4インチの角材にピックアップを取り付けたログは、長年の研究と実験から生み出したレスの理論を形にしたもので、外観を保つため取りはずしのできるウイングを両側に付けたL-5を小さくしたようなギターで、レスはこのログを手にハリウッドへ向かい、新たにレス・ポールトリオを結成し、ビング・クロスビー等のバックで演奏活動を続け、しだいにギタリスト、レス・ポールの名は超ビッグネームとなって行った。

1949年女性ボーカリスト、メアリー・フォードと結婚。彼女とデュエットによるレコードはいずれもヒット・チャートの上位にランクされ、"How high the Moon" などはその代表作である。その間、継ぎはぎだらけのログをもっと楽器らしくしたいという夢をギブソンに託したものの、丁重に断られたのは前述の通りである。

"King of Electric Guitar" レス・ポール・モデルの誕生

1950年遂にソリッドボディ・エレクトリックギターの開発に着手することを決定したギブソンが最も必要と考えた人物、それはレス・ポールであった。ギブソンにとってレスのギタリストとしての才能とミュージシャンとしての名声はもちろん、後のギター製作とエレクトロニクスに関する頭脳、彼の全てが必要であった。

そして1952年革新的な新社長テッド・マッカーティは、その前々年から開発をすすめていたギブソン独自のデザインのソリッド・エレクトリックギターのプロトタイプを持って、今度はギブソンの方からレスを訪ねて行った。ペンシルバニアのデラウェア・ウォーターギャップにあるレスと夫人のレコーディングの現場にである。そのギターこそが、メイプルカーブド・トップ削り出しのシングル・カッタウェイ・ボディーのギターであった。

レスは興奮するほどにホレ込み、二人で一晩中協議し、最終的にレスの考案したトラピーズ・テールピース＆ブリッジ（別称ブランコ・テールピース）を取り付けることを中心とした手書の書類を取り交すことで契約し、そのギターには彼の名を冠することとした。後にKing of Electric Guitarの栄誉を受けるに至る、確固たるモデル系列を築きあげる"Les-Paul"が誕生したのである。

このレス・ポール・ギターのデザインについては様々の説があるが、[illegible]に発表した[illegible]エレクトリック・[illegible]・ES-295が、そのアウトラインになった模様である。しかし、いずれにせよこのレス・ポールほど、エレクトリック・ギターの後の歴史の中でこれほど高い評価を受けたギターはないであろう。

使用するプレイヤーの層、音楽ジャンルの幅の広さはもちろん、そのバリエイションの豊富さと、そして他のギター・メーカーに与えた影響等あらゆる意味においてKing of Electric Guitarの名を欲しいままにしているのである。ハードメイプルのカーブド・トップ、ソリッド・マホガニーのバック及びネック、各弦ごとに対して付けられているアジャスタブル・ポールピースのシングル・コイル・ピックアップP-90が2個、それをカバーするクリーム色のプラスチック・カバー、ブラジリアン・ローズウッドのフレットボード、22フレット、24¾"スケール、クリーム色のピックガード、オフ・ホワイトのバインディングがついたゴールド・フィニッシュ・トップ（テッドがレスに見せたこの記念すべきギターは、ゴールド・トップではなくサンバースト・フィニッシュで、ゴールド・トップはレスが契約後に提案したアイデアだったが）、金色のハットボックスノブの付いたボリューム＆トーン2組、トラピーズ・スタイルのバー・コンビネーション・ブリッジ、クルーソン・マシンヘッド、12¾×17¼×1¾インチのシングル・カッタウェイ・ボディー。

全てが新鮮で、美しく、魅力に溢れたスマートなギター。ギターの既成概念の全てを見事に覆した魅惑的なギターはこうしたスタイルとスペックで姿を現わしたのである。これこそが30数年後の今日、世界中のギタリストのあこがれであり、夢であり、偉大なるギブソンの礎なのである。

そしてこのカタログは、このレス・ポールギターに始まるのである。

Gibson Artist
Les Paul

資料提供：(株)プレイヤー・コーポレーション